

魔法のトイレ

大阪府 関西創価高等学校 1年 武田 美紀子

中に入るとふたが開く。便座が温かく終わったら勝手に水が流れてふたが閉まる。水で洗ってくれる機能まで。なんとぜいたくなことか。現地の人には申し訳ないが「ああ、早く日本のトイレを使いたい」と思った今年の夏だった。

私はこの夏、マレーシアに行った。親元を離れて過ごす初めての海外。きれいな空港、高層ビル。短い旅ではあるがきつと楽しい時間になりそうだと期待に胸を膨らませていた。事実、マレーシアは素晴らしい国だった。日差しは強いが、豊かに緑が生い茂る街路樹が自然の日傘となって安らぎを与えてくれる。優しい空間がとても心地よかった。

「私、この国、大好き!」と思った。ただ一点、困ったのが農村部を訪ねたときの「トイレ事情」だ。入ってみるとまあびっくり。床に穴を開けただけの、まるで「江戸時代の共同トイレ」で、一帯が水浸しなのだ。驚いた。せっかく好きになった国だけに、どうしてこうなっているのか調べてみたくなった。

世界にはいろいろなトイレがある。日本でメジャーな温水洗浄便座もあれば、用水路に板を渡しただけのドアのないトイレ、有料トイレもあるし、紙は置かれているほうが珍しい。マレーシアは、マレー式トイレ。個室に、ホースと大きなごみ箱が付いていた。日本のトイレをここに設置したらいいのと思ったが、調べると簡単にいかない理由があった。

まず、水圧が弱いこと。トイレットペーパーを流すことが難しいのだ。だから現地の人は昔から用を足した後ホースの水で洗っている。いわゆる手動ウォッシュレット。床が水浸しなのはそのためだ。最近ペーパーが置かれるようになったが、使用後は、流さず大きなごみ箱に捨てている。そのペーパーも個室に置かず入り口に取り付けて必要な分だけ取って個室に入るといった仕組みになっている。

日本のトイレは世界でも有名だというが、マレーシアに限らず、単純にどの国でも設置できるものではないらしい。主な理由は3つ。

1つ目にユニットバスが主流の国では便器近くに電源コンセントが設置されていないこと。温水洗浄便座が使えない。

2つ目は、水質の違い。日本の水道水は軟水、海外では硬水が使用されている地域が多い。硬水を日本製の温水洗浄便座用で使用すると故障の原因となるため。

3つ目は、便器が盗まれるということ。治安が悪い地域で公共トイレなどに温水洗浄便座を設置すると、盗まれたり、破壊されることがあるらしい。

SDGsの6番目の目標に「安全な水とトイレを世界中に」とある。世界では3人に1人がトイレのない生活を送っているという。日本の技術で世界中にきれいなトイレが設置されることを願わずにはられない。

日本では1990年から2000年ごろまで、百貨店の1階にはトイレを置かないという考えが主流であったという。それは買い物もしないのにトイレに立ち寄る人を減らそうという発想だったらしい。しかしこの方法は百貨店からの客離れを招いた。トイレへのアクセスを複雑にすると人の心まで離れてしまうという、ある種の社会実験であったと思う。その反省から21世紀に入ると、こぞって1階にきれいなトイレが置かれるようになったそうだ。今ではアメニティグッズを置くところまであ

る。女性がい物中に休憩できるようなきれいなトイレにするとその百貨店は成功するというのが現在の定説だそうだ。

世界は百貨店ではないが、人間が健康で尊厳を持って生きていくために、トイレ事情にもっと注力しなければならぬと強く思う。

トイレ事情に関してユニセフの報告書に次の指摘がある。

○不衛生な環境で病気にかかりやすくなり、重症化すると命を落とすこともある

○女性にとって用を足している姿を人に見られるかもしれないという不安は切実な問題

○清潔で管理されたトイレで人目に触れず用を足せる環境が尊厳を守ることにつながる

世界から清潔で機能性が高いと称賛される日本のトイレが、世界中に広まってほしいと強く願う。ただトイレを置くということだけでなく、衛生的な生活習慣の教育も必要だ。ある海外の方が日本のトイレを見た時に「これは魔法だ」と言ったそうだ。自動で開閉するから？ それとも便座が温かいから？ いや、そういった機能の一断面でなく、身近なトイレをきれいに使おうとする心、そして使う人の尊厳という視点での配慮と工夫がトイレという場所にあること、それが1つの具体的な形となって実現していることを指して「魔法」と言ったのだろうと私は思う。

こんなすてきな魔法を、世界中に広げていきたい。不適切な水と衛生環境に由来する疾患で命を落とす5歳未満の子どもの数は1日に800人である。トイレが救う命がある。

